琹後集　二

へ 2
4328
2

琴後集巻三

秋歌

山家立秋

松のあらし谷のかけひもきゝしよりは秋たちぬとやおとかはるらむ

田家立秋

見渡せは色はまたそむる家門のをさ田よりこそ秋は来にけれ

幽栖秋来

訪ふ人もなき庭のよもきの露はかり秋をは来て初風そ吹

あはれさるやとりも秋来る

杜初秋

をちこちの森をよそにあふは玉むくらの門をたちよる

故 先光清風氏 大正十三年十月三十日 先光華氏寄贈

へ 2 4328 2
へ 4 4350 2

みたらしの岩うつ波も音かへはたゞすのもりのあきの初かせ

秋来気色

ゆく風も夢うちさへてみし河やあふさ入江の波のすゞしさ

初秋風

けさはまや軒のしら萩うちさやぐ穂にあらはれて秋風ぞふく

初秋来

ちりそむる桐の一葉に秋来ぬとはてるや風のたよりなるらん

早秋

秋たつやまだうらわかき萩原を風の音のゝ穂に出にけり

あまるてふ衣のあふしきを憂らふはみゆきふすまと何おもひけん

早秋風

けさよりは猶穂のあきのはじめとや稲葉より先風そよぐらん

早涼

信楽の外山乃あさきすゞしさを夕暮乃雨や秋をさそへる

夕くれは露おきむすぶ小笹原はや秋なれや風のすゞしき

山家秋

月すめる庵も中々四方の山里の稲葉にやどる露もみえけり

兼待七夕

天の河月乃ふねもよそひせよほしのあふせはちかく成けり

いそ床のちりを拂ぬ枕もなし天乃河原に秋立しより

久待七夕

いはりとく七夕のゆふべをまちてや星のあふ夜なるらん

七夕

あまの川やそ瀬の月いく渡もかすしもやらぬよ妻むかへなる

なぬかの秋

初秋はなよひやかさんたく衣をみるかうはせぬすりの袖

二星適逢

う往もなくあふとはすれとたなはたの雲乃衣よなかき遠なる

星河秋久

天の河とほき神代のむかしより秋をちきりこそ名はなかれゆき

七夕湊

あまのかはしみなとの湊つるも今宵やほしま先まちらむ

七夕橋

今宵あきはもみちの橋もいそかしにかきわたるれや烏鵲渡し

七夕馬

おほひしも雲井にかける駒もかれあまの待わぬる天の河水ふ

七夕管絃

糸竹のしらへにたなはたよへさへ星のあふよはあはれそへきか

海邊七夕

汲合のたまの海士人うちつきよみるめや今宵先よるらむ

七夕霧

おもひくてあふよの星よなしへとやとまる袖も露そかゝらん

七夕枕

されそれの今宵とりかはさし枕のちりもたえもし絶ぬ契りは

織女雲の衣

雨となる袖のわかれにたなはたの雲のころもほしとやいらぬ

乞巧奠

まちわたる秋のかぎりはあらんかぎりてふ糸まかせなん

七夕七首

七日をかれへしをうらむまで人のなさけまれを

まちにあふ名もなつかしき女郎花たなはたつめのあくへてぞとへん

七日まつの宵のまちしきいのりこそいひなれハ

天の河ゆふぐれ雲もうちはれてたなはたつめの袖かとぞみる

なれそめし契りしるふみに離のもとに男ぞて

なれそめしかの宵にまつかりの糸のよりあふ末や催むすふらん

たなはたの秋琴ひく女あり

たなはたのたえぬをてひくやはりに松ふくかぜにかよへるなるらん

七日の夕へ雨をうらむ

もるともあすのゆふへをうらみあすのよく天の河わたしたえずハ

七日女とも空をまつる

なれそめしあふ秋まれか空の月にこゝろあるさへわかれかなしき

七日の秋暁をかなしむ

暁のゆふかぜふくれあまの川あさ瀬ふかきハ君くるのや

七首

七日の秋秋の七くさをよめる

なれそめしかの宵やかさん秋萩の花すり衣以袖あやめぬ宵に

天の河かもへのをとれかさまりてるひくもほしのんとやしる
なかころの袂かへて秋風のあまるほとへす夜のくすける
たちわかるゝの袖のしきもかくこそこえるあもあやまりほふるてしこ
今宵しもたなばたのまたあくまて誰もちぬへき友をも母をも
松枝のむすひけることを浮きにすゝしてとはゞなとられへしと
ほし合のあふりをこれとこのへとや霧のしほもしほの露

なかなかの秋あはなきなる

天乃川あきゆく秋をも見はてぬかく暁霧に袖ぬらしきり

七夕恋

あふこともまれなる中よ心をもゆめて天は妹背にたくいましハ

七夕別

別まてはいとゞかきぬ天の川あまみ月乃名をたのめなる
わかれてしむおきその風に露ちらはせめてやすらへ天乃河あまに

あまみ月八日

松もるのわかれまるとる心にしみ侍こゝ侍らぬきさふなりはさすまん

閏月七夕

なほはるゝ袖ぬらしせむやたちわかるゝのあふ秋の名のこころかさねん

萩

山里をいとゞ訪れぬ松の声をやむとすれなをさきの上風
袖の上へよる朝のほしき秋風のなき萩の葉にあらしかなる
よひく小なれていそ訪ぬ妻なれや秋風やとる萩すみの下萩

萩風

契りおく人しもなくて秋といへはぬるゝ袂を忘れぬときの上風

秋風萩の葉をふく

あはれをもしらしも人のこゝろより萩ふく風のおとにやきかん

萩

宮人の袖のかをりやとゝむらん野辺も手にをる庭のゝ萩はら

閑庭萩

やま里やとはれぬ庭のうちに萩さくらせめてをしらむ跡ともなる

さるをしもとひきぬへくそのまゝあるもこれしる庭の萩原

雨にぬれて萩のはなをこそ見る

よしやたゞ衣にほはせまし萩すりかゆく袖は雨にぬるとも

千葉か露にすみきる野萩露を

秋くさの名にたつそのゝ名露に袖にほはせてきふは折て見む

萩乃露おもし

夜さむのよは袖もかはりの小萩原はらはぬ露を衣とそ見る

きえぬへし

人のきる野にとまるをおもへし風さそふともなひきそすな

露

稲葉かり袖のかをりにほえていつもすゝしきそかれつゝ

そのかみさへありきにおもふ秋しいへと袖の露きえ

庭露

かくあらむ月さもやとせ庭のおものそこれか袖に露おきそ

秋曙

露の身にうきふる里よさもあらはあれ秋もたきくとおもふ世こそうき
野ゝほとゝて

野ゝほのうはらひやすき露ましもちらぬる世をたくへてそみる

草花色々

わかくさにかさぬる袖のことあみつすくる野へのむれのちくさは

栽秋花

うゑし植て野への千種の花の色をなひのこきぬやとの秋かな

むしの音も小てきの花も夕露をわけ見るまゝのうらちらし

月照草花

すむ月をあらいことやさしきれ一しをはなの袖におもかけしせる

望花遠客

秋の野にと思ふうら縁八さとしけふ占れおもてめやもきりの花書
をちぬへし今宵めく野へにおくれて誰もこゝ縁をはなみなすらん
人く秋の野に行ふ

かつふしきたくすくとつゝ秋の野の萩のあさひにこゝのひかりしつ

おもふとち秋野の花すゝろ侍るくれぬいむの声をも露のん

小鷹狩

真萩ちるをはなるれて狩人の袖あきらくすおもふ乃ゆふくせ
いなはまおおそしきとこて

稲妻のひかりもみえよやとる陽をたくるむしあるる露の比せ秋

露

花すゝはひ月をやとして秋の野乃衣をへよきをおきそしし露

風をまたぬ草葉の露よりはかなさは我身の末をたのみおくべき

蜘のいに露のかゝれるを

いとすきあひくとみしはさゝかにのすかきに露のたまそかゝれる

田露

ほのかなる稲田のほかになくせをいほりに草の露をとるとふ

虫のねいとかなし

露ふかきむくらがもとの夕まくれにさきはてぬ虫の音ぞする

寺静にして虫をきく

をとづれぬをしをとすあるむろのとに人待顔やなれにかへる

雨中虫

よもすがら窓うつ雨にきこゆるはしのびやかになくすがく

床蛬

たかそはる露の枕床になく声もむすほれゆく秋のよすがら

松虫

あはれさの心をしあはれとおもふ人待顔に月になく声

鹿

夕風にま萩ちる野のかり枕しかのなきけんはいかにぬれぬる

野鹿交萩

ま萩ちるふしの花をまくらしてなく鹿さそふ夕風もがな

荒野近

わがやどの友ときくこそあはれなれ枕の山にふかく鹿の声

秋田

んとくかゝりし小田のひつちさへ穂に出ぬへく頼む秋かな

山田もる賤のかりほにたくひの煙とともにたちあかすらん

穂に出ぬるころにひつちやうしとみんなれやおひたるらんのくさひとさく

田家興

月きよに紀ありし田の京乃かせ庵にこもりて夜をあかさん

田家秋晩

人々も夕へさおのかすみかとや家穂にはぬるを田のかしらり

稲舟を

みなと田に野夕かすふいふあ舟にはかゝしはふりせてこそ漕

秋眺望

たなまよの野へ乃うき霧とゝくしてとおもはく松の村立

旅宿秋暁

菅むしろさゝのやの旅枕あけはに露りぬれぬもむかし

ことやら人とはかくらんを明の月にのこる星乃かゝる露を

秋烟

かつらすゝし山田のくるもくれ火の煙さひしき秋の夕くれ

秋聲

おもの家も色うちそへて雁鳴こゑしはさわく浦の松風

秋夕

くれぬ間はむしの音ととも池ちかく月にいつかとて秋を惜き

秋夕風

吹風にふけはともに夕暮と萩の葉末夕にわかくらさへたるらん

秋夕思

大かたに秋をしらする夕霧のたちとる袖をおきてなかむる

秋夜

ねやの戸に降さおとろかほ秋の夜乃いくむすひせし夢のなこりを

秋夢

村雨のおとに夢さむる秋の枕をいくたひ夢をむすひ侘きん

秋雨

花の世乃人ハ忘しおもせと菊に暮れなきくあまの衣を

月

世のうさもわすれてたねとおもふ身を老をは月になと親くらん

あふといへいかにしぬともなれのほかとひくる月を友となみる

こきてしもあはれとそみる山里に月も我身もすみくらすを

やちまたに花をかさゝしと車のちかひは月のくまなきみよを

松のはにうつ雨もあらしもおとまさるとは月の秋はてきけり

くもる秋の月

もれ出る月やいつこそゆく雲にあはれめも出ぬ秋のそらふ

対雨待月

いはしとも月まちかねの心をきなしに先すむ宿のいてる宿なりけり

見月

なのしそ秋をいはれはいとひきん月にこよひのあくさむきを

思月

あはれとは月も思ふなんおもふ人なよ関にいくよかたらふ我身を

あらし山の月

山の名のあらしにはらふ月なれはとなせの浪に影そくたくる

月出山

麻乃葉にかゝる露とかつみれはまたくらき山に月そ出ぬる

初昇月

たちのほる雲におくれて山の端にかつみえそむる秋のよの月

暮天月

木の間よりもるも夕れ月みれは先こゝろこそ紀のきよき秋

深秋月

定る秋とおもふて月をいふに見れともいは〻秋は寄にぬれぬる

暁天月

かたふける影をあはれと見はつるか身のさくひある山の端の月

秋〻見月

照とめて曇るをいとはぬよ〻の月まち侘をはくるゝ秋の暁

舟をうかへて月をみる

はては秋の浪にうかへる河舟は月のゆくへに漕せたゝなん

河なみに月のゆくへをそこふ秋を惜ぬ舟もうかりきる

すむ月にむすゆくかひの雫をはかつ〻のちるかとそみる

山館見月

人とはぬ深山の庵乃秋をたゝ月こそやもと侍なるらひきれ

かくてのこ月こそ友と住なれん葉のちり乃世をのかれ来て

霧中月

深き秋のあはれはそへぬうす霧に光をさへる山の端の月
きりの海を出る月やみ底にしつめる玉の影とこそみん

海辺月

あま火たく煙を寄する吹きたて月をみせける須磨の松風

難波の浦の月

月見ればなにはのあしをかりそめの海士となるとも浦訓みきり
なちへ里難波のことを人とはゞ月のこゝは津の浦とこたへん

江月

波にあらふ光をしもとみはらぬ太刀ばかりなる江の秋の夜の月

名所月

庇多河あすも来てこん秋の月た照のまゝにかゝやくる比

なりゆくも思ひ田子の浦にすむ月は影を波間にうつしてそみる
舟とめて今宵はこゝにあかしかた名にしおふなる月をこそ見め

きよ河の月

みし春の花はけえて桜川あふはかつらの花をなかるし

橋月

すむ月の光の橋をしもはきかくてもみるや波まにてる影

舟の泊の有明乃月

ゆく舟をきりたちこむる波のうへにほのめく見ゆる有明の月
釣やふるきあれやまや有明の月もおちかたよその河舟

やんごとなき殿の月の宴に侍りて

君これのよそのひかりて影も所せきまで照りそふ秋そ

月あかき夜人の家乃いけを見て

すむ人のこゝろおもしられけり月をやとせる庭の池水

幽栖秋月

たれに又なしとハいひそむくらもはてられ月の影ハとひけり

井辺月

底ひをも松井のしミつにほまれてこゝの宿に月やとるなり

山家月

かくて世をおもひのすさみし人やこの月見し山に住なれにけり

山里にて月の夜都をおもふ

昔みし都のともも月まつらむ我すむ山乃あなたをおもふそらあ

むすふ垣根の宿と松の戸とおもへはやいつも秋のよの月

都月

やちまたにすみゆく月のむすふれの影かきあかす殿もなし

老衲憐月

ちゆきまも松すくうたゝ夢すむ空になる月をあはれみこゝろハ

獨窓見月

獨ものおもへる身も老の世をわすれてむかふ秋のよ乃月

秋月勝春花

秋といへるむく秋もともこてる月をあはれなるゝに何さくへし

十五夜月

世のつねはあはぬなかひのなこりもみちたらんいせる秋のよの月

としことのくもなかひもとまれ影の月よ入まて見えん

かきやとすいつもあれの心ほとあれと秋をなかはすすめるよあ月
わのこまく今宵乃月みあくれていく里人か心をほさきまん
人なきうらわの海士も山かつも今宵の月をとられかえさるを

　白河少将君のめしきる時よみてまゐらするなうえの中

おまいともきこえて今宵の月これは絶るへまかきらやいおもうぬ
かすりなきちゝの秋もあり行しと一夜をゑて月のすむらん
すしや月かくるなきひいあらはともいつと今宵またくへてはうん
さしと心ひ折てしと伝らん秋もあし月のかつらの花のさかりは
く雨もなく思ひこそやれ可し人もこよひの月をかくやめはると
なれらはふみてものあうれ秋いふ身も今宵乃月いめ作りし給か
然るやも見ことあるあよの月 いのうちあやいうまさやききき

いか升ことその玉をみくらんおよすひく雨なき月乃見えて
重ことまよ八月十五の夜そくあやかくふ雲のさてすまひ
のこ仍ねらぬをと今宵いちりもりのく雨もあらすさらぬ
左右吉宜国のきもひいふとてあさちかもと乃家
前をわくれいともやく定年よ古なとまおひてうそふ
おあへまあるしの翁な陀の不る親をわりもの在
まてうち海ちれるもおもしき秋の今夜なり家
としをはしめてあみ子ちえ子なるあさやかあるき
てりあくれいていまかきあうてはし夜のある
まなるもふすひい寵なからをおふ中れ秋定ゆきへ
閑中大使の玉をしてすとうるひあうてゆくりあう

晴てまゐるも光の外の光さへさらんとして
ちら行ゆくゆゑのまにまに
光らしへすかくてみきえまし橘のかきふむ庭にすめる月影

十五首

十五夜月

月よしと秋よしといひしむかしこそハかしこく秋をやらふひ初めん

月前風

松のはも月の光となりにけり雲やよはらふ秋の初風

月前露

こ宵しも月やそれとや庭の新草の葉の紀も露おきならん

山月

落ひちのたれ山より出てなとかそのかり月のかきハすむらん

野月

まお花乃さくひとハみし名にしおふ玉の横野にすめる秋の月

浦月

あしの葉に夕しほ風ふ難波なるさへの津も月に明ゆく

花洛月

月にとひ月にとはれてあかしもすさみならぬ都人かな

寄月忘恋

おもかさもとひてすれておもふことを月にはかこと契りおきけん

寄月恨恋

それやこのめ宮ふうらみを我からのおこるに月ハくまなかりける

寄月別恋

いかにしてなくさめんと有とて月よひとまつ袖のわかれを

月下旅泊

袖のうへに宿かる月をかたしきていくよあしの夜枕せし

月下眺望

六田川むかし柳ちりそめてなかきのよかけ月もへたてそ

月下述懐

ともすれは袂の露をとへてまりかくふく老を月もなくへて

月下懐旧

月をこそおもふともこそわれよ昔をむかしの秋を誰とかたらん

月下交友 以上

浦てしらぬ海はいさすむしろく夜なき月をみるはして

月前紅葉

もみちちる今一しほをそへよとや月さへ霜をまてなすらん

月前萩

月みまくふ人あれや夕庭に露もみたれて萩かちる

月下蔦

せかれまつほる蔦の花も見えうつろふ世月のしら風

月前遠望

はるかなる浦もなかなか海あれや月もくもすみわたる秋は

月前遠情

月よこそ松ありきはへ昔みし浦の入江乃秋のうら波

月前幽情

あはれともうしとも浦しあはふやのこのふか窓にやどる月影

十三夜月

一とせの花乃とちめとさく菊にさかなひの月をさへてらさる

久かた乃月のかつらの花これは色ふ秋にかゝるはさかりなり

九月十三夜月をもてあそふといふことを

花もふたゝひかきの菊をてらし月みる秋もまたあらなん

駒迎

あみなそれせたの長橋きりきれて波の上ゆく望月の駒

駒引

雲のうへにいさめる駒をむかへ来てきふ引こまの使ならし

みちのくのあだちの駒もなつけ来てみなのおしにあふ坂の関

雁

山風乃さそふ木の葉とみる中にかりかねを田にかけるかな

薄暮初雁

秋風のふきてさむけくゆふへなれは雁の声をぞまちしより

ゆふまくれのうちよりおりくる初雁の声なきなかれをしきさし

月前雁来

遠山の雲もかゝらぬ山の端にかゝる雁を月のくまなる

すみのぼる月のかつらにおく露を雁にかへれて雁はまたにけり

霧

ゆくすゑはほのふことえて野河のあまきめや霧の海にひとむらん

秋といへる神のいふきの名をもしるく先たちてあつ峰のうき露

いましてみのうき秋をわすられまし露のまくらは世を憐らとも

雪底筏

あすか河ちる流も見えす立雪まくられ筏やいつちこくれる

野分

野分せしこすゑの事や新ふして下葉は残しる秋もきのなれ

擣衣

世をうみの浦風さむく寄る枕に衣うつ声も浦ふの乃しき旅人

名所擣衣

さよ更てきけいさひしきいめ人のなしらの田にも衣うつ夢

更る秋のとほよる波に夢見えて衣うつなりすまの浦人

月の夜に衣うつをきく

さよ更ぬるこゑきくは空にかよへるや月にあはれのうちもそけるん

鶉

うら枯る秋のすゑ野を衣かなる声もをはるのなくなるのこゑは

鴫

旅まくら夜もむすはておきゐ伝しものこひしおきの夢をききつつ

重陽宴

さのはおいくむともあしたさうしも待ちきくの花のむしろに

ま人のかさしの菊の花乃いろもかすひてすすふ神のむしろさ紀

菊花始開

下露もかたるはかりに咲花もとうつ語と菊のうへうつそおき

菊

よそふれと花をもしらぬたる菊の露のおもてに君おもえぬへし
なほさへは老もしら山ときくの露いさゝか詠ことに折てかさゝん

折菊

猶ろもんたのしもさゝふたる菊はをしくとも香さへあせすなれはまし
人のもとより　君とるかさゝんことのはなりては潤と
なるへき菊のうへの露とあるへし

閑庭菊

下露をあたらとなかには菊の露あるはかふことるとひと
松のはしたつきよ霜のますさみにはくろひさへつ菊のきせなる

菊閑中友

世をいとふ人のとくひとおくの露さえてこゝ路の友ともこえん
この庵にも世をもちきれ世のうさといさゝか菊の露に別て
月の枕きくをこえて
みをとおもあはれひとえきりも月の光そへるさかな菊の色なれ

月照菊花

さゝなみの浦にはこへて村菊をよるさへみよと月やてらせる
照月の光もしもとみえわかて老せぬ色にほふ白きくの花

菊契多秋

山人乃住てふ岩のきくの花に秋もいくたかかそへはすまし
东海寺の山あみに菊もちらちさかりなる比山さとを
とふとらふこと〳〵

いさとめて人もまてこんもみちもも萩もえならぬ秋の山里

蔦

染かゝる梢のはつの村もみち秋をはさへ以ろになすはく

紅葉

ちくれするゝみの山ハもみち葉の色こき秋に先ちりにけり

かさとりの山はもみちも色こきをいつ見えれの夜ハもしせし

しくれする雲よりもれる蔭山下てる以降ハもみちてき里

紅葉浅

一枝をすはこそたちれ蔭もみち青葉おほえてくる山路に

これめ我ゝ手に入の女の蔭もみち秋もわくおる心ちこそすれ

紅葉浅深

一むらのさら松のもみち先ぞあひく藤ぞ秋にはおくれけれ

林葉漸紅

紅葉はまゝふるやしもトもトきハみとりをのこすあふみの世こ代

黄葉

露ふるゝ時もさあ松の下もみちして紀ある秋をこせけり

紅葉深

桂原さへにほふ中よくおきもみち色こく紀をもちせの山

山路紅葉

みちもとをまてみち照らふかくこ山く洒なくみゆる秋の以従

紅葉勝花

花よりもあはれいふかしこ山本の木のいろく紅葉ふすれは

紅葉留客

もみぢ葉のちらぬかぎりは山里に秋をのこしてたちぞかねつる
家路をも誰かわすれんもみぢ葉に心をとめぬ人しなければ
山さとに鳴くかりがねは村もみぢ時雨にそむる後を悔や

松間紅葉

深みどり色をもみぢにゆづりてや松も時雨のこなたはるらん
ちらぬ間をまつにかざさん村もみぢ錦のおりしことのさま

霰紅葉

秋の色はあられのもりのもみぢ葉にこれぞ残りをとゞめおかん

林紅葉

こぬれまでかつ色まやしこそこれと霧もらさぬ秋の色かな

故郷紅葉

あれはてし志賀の都のむら紅葉にしきぞ見れ昔ながらん

箱根紅葉

箱根路をもみぢしにけり旅人の山こえてきし袖もにほふまで

行路紅葉

散しきるそはのもみぢに路つきて霧の上ゆく山の旅人
みゆきせしむかしの秋のおもかげに紅葉を見る千世の古道
ふもとの色も山路もあかくみえけるを時雨れくるしの村立
家路をも何かいそがんもみぢ葉の下照るまゝは道ぞよし

江紅葉

大井河の江にはもみぢ葉のちりかゝるかぎりは舟はとゞめん

社邊紅葉

露しものいくよかさねて神のます みむろの山はもみぢしぬらん

松熊やかつらのみやのむら紅葉に照まさりてそらはことなる

神のやしろのおほちを帰りきてはいづきみのうちの
もみぢをぞ見て

行秋をひきとゞめたるしめのうちは月に紅葉のあかすもあるかな

月前紅葉

梢もりもりくるかきの露なれは月も紅葉をそむるとぞ見る

瀧紅葉

布引のたきのしら糸くれなゐにむら濃に染てちる紅葉かな

長月なかばはしぐれのみ錦に家にあそびて

あやなせそ誰もこゝもとや中島のもみぢも波にちられぬらん

関路秋風

ゆく秋の梢をさそふや関風にもみぢ吹こえあしがらの関

秋霜

おく霜よしばしかゝれる葉の末かくていくよの秋をすぐせし

野しもの花や月にそへてこそ秋もなごりの有明の頃

くれの秋

志ぐるゝも露もちりすぎる紅葉にきほふ行く秋をかきとゞめん

さむしろも涙をしぼる別れ路に秋はなごりもやはおしむ

末の紀原麻のたうとくしみきりなく書を秋てゝぬる

暮秋野

ちらりなく染る梢の紅しもよ見れおほよのほとをしるしき

暮秋興

あくまなき山路の菊の花もこほもみちをはしよを待ものこ穴

晩秋旅

真萩ちりもみちみちて山さとは秋をしらの声まちて呼

有月はこれりやまるをといて

やまはとハ秋のふかりてあはれなる夜半まりけ　ともれちる比

琴後集巻四

冬歌

十月はしめ秋のなこりなきさんを

本くさこれ色なほのこるきふよりハあらぬ紅葉を袖かさねて

もみちちり嵐の声さ帰る山里ハ秋をきのふとたのはさうきり

神無月よりり山さとやとりて

このころる山かきの刈り枕らく路すむまそいつと秋をはる

冬の夜久

想なしき夜ふ衣ぬおくてきふよりきこのしら言せん

うしもふく月をいくもやと流れし時雨あかて袖のくち果ま

深くさの里を冬ますせて

とふ人もあらしはいとゞ門さしつ野となる里の冬枯の比

時雨

雲とちるみねは夕日のかげ見えてふもとのさとに時雨ふるらし

神無月ころ縣居の森のほとりに詣へ行日よみける

まりて少林院にて人々と共によみけるに志れと

いふことを題にて

やしほふ山ならぬ緑も紅にそめん時雨の空はいさ知られて

ある夜は雲はありもしつかなる庭の葉はさしも時雨の音そきこゆる

夕風のふきしきてみねの松にきこえしへとうしふとききく

かへるさふきて袖はほさてきん山のしはくをかさとる人へは

初冬時雨

むら紅葉なほちりのこるかきをあて今一しほと時雨きりきり

野風のさそふもみちはありさひて梢はさわぐ初しくれかな

山路時雨

もみち葉を袖にはらふ旅人もあはれ時雨ともに山の下して

旅路時雨

袖ぬれてくゝる木こりもこえかへる高ね此空をしくれ之介

山中時雨

はれみちは時雨来にきり富士の根をまてとなれりとみゆらし

山家時雨

山くさや我れ此葉なしてちりもなしかやゝ影もふしくれなる比

木の葉ふる音を影もふ先立ててやくそ時雨をさそふ山風

閑居時雨

世をはなれすむ身をもさらさしと竹の戸のやをとふ時雨かな

聞時雨

中々に友ときくこそ哀なれねさめかちなる槙の時雨を

行路時雨

行人もおなし木陰を頼み来て野ちの時雨にあひやとりせり

里時雨

一しきりはれて跡よりさそはれ来てまたさしかゝる衣手のさと

時雨陰晴

はるゝかとみれはさなから雲の月やそのやとりやさらにあかぬらん

述子の君ははもよりもみちに催されて　神無月志

くれなゐ深しもみちのちりうせぬ身をと君まちて

祈るふとのまつふるへし

もみち葉も君にひかれて色深きかの秋のゆかりやとらめし

からはに月をも日々にくしてあかぬ林泉にうつりてきゐるふ

芳宜園の森にまはのきて浦ゆてもきくふの山本みの

ろにいひはくきつ折しを思ひ出て紅葉を

旅人のこゝろもみちを契りおきし人は秋すらはてさりしを

残るもみちを惜めぬ

なんてまたや鳴くきのふらし猶山は秋の色ものこれ

残菊

ちりぬる菊も我身にさくへらんいくく霜やいつれ憐むを

訪菊秋やにかきる

なこりそとかをる枕もあれしあせやのまくの秋にわかれて

山家訪菊

訪れすむ身のこゝろひとて世の秋にわくれて菊も哀れとそみる

神な月ちりのこりよらはちらひさる菊に霜おきけり

これやこのうつろひもせぬ菊に移りてや霜の置らん

霜

移すさき門田の面やあさりきん霜に訪ふあるまへの板そし

霜似沙塵

星そはる影もの霜の深き秋にすゝも隠さぬ塵のさし

露結為霜

日影さへかはりて霜となりにけり夕風さゆる宿の霧ある

落葉

木枯のさえ寒き夜の山さとは苔路にまけの紅葉ちとそみる

松杉ひとやまとはんおろしの音さえて木の葉ふきちる宿の　幸倖

落葉浮水

もみち葉を浪もてはらふ舟河きりの山の秋やたつにはある

河みなもそもみちなる

落まちみちにさる淵く岩河にもみちそるて夕あらしかな

庭落葉

かぜ掃ふことをしとそ日をふれは庭さへさえて庵のもみちは

車中落葉

もみち葉を風のさそへるを車はさゝる山乃下すゝれせり

月の杉木の葉乃ちるをとりて

月くまのなれけり雲にさりきなく三くさしまのは木の葉こそきけり

ちりゆふもみちは月もくもる松はすさ御しきるかきりしもなし

冬松

日数されは山菊の葉の松しめり松の葉乃霜のふところふかゝらん

山家冬松

山ふかのさとのしるやま松きえくさゝや松かの為葉かさん

寒草

たゝ三もし冬田のつらゝは麦の霜に消へても色もめきし

冬の野はさらされは霜にかれふしてねくるぬ袖を拂ふ夕風

あはれまも路くろ麦をなよひ草ニのをとられに御しるみえけり

野径寒草

ゆく人もすゝぬ野径に枯立てつれなくこゆるをとられへし

園寒草

霜のうへ乃跡さへ冬はなくかれし野のゝをとろのかや原

庭寒草

吹風にさられし庭の糸すゝきを払はしもまそむすほさけ

枯野をゆくとて

霜やとひあらのゝ萩枯ふして道わかれし面わきもなし

枯さる萩まゝきて人にゆくはしまる

冬されはきゝつとゐるときの葉に君なけはんとるひかきなや

寒菊

霜の後にさくてふ菊の花あれハ紫なる秋の残りやのこせる

池寒蘆

船ならむすむやなみのたちさえて霜にかれゆく池の村あし

濱邊寒芦

まくはもあしのかれ葉にまさへて夕風さわくなにはの濱

冬嶺孤松

ちみちてハ風にゆるせぬ木ともなしひとりをのへの松をのこして

椎柴

冬こもる峯の下柴しひてふきさわくなれんなるを

谷の名ハかくれ椎柴の落葉さへ深き紫の濱乃山津とまむせん

暁残月

霜さむき夜の月にうかれてまれなる庵の影をこそまて

氷

くみすてし淀よりやかてこほるらんかさやまとのいさゝのかは

氷始結

冬すの氷ひとかみもとえぬ山河にあさ瀬の水先そむすへる

水留冬夢

水のおと落葉にはしるいさゝ水をたえすふさきへてまれなかりき

よのまにや水もはへん夏ゆきハ秋のまひの音絶にきて

湖氷

はくその雪にたちかへかしこまり水をあまるゝとはの波つる

志賀の浦やあしまの氷むすふ日は嵐のうへも波をさわかぬ

氷閉舟

みなれたるひろの大ふねさしわひて氷にとむる志かのうら舟

冬月

木の葉は霜にうつれる月かけもあはれにみえし秋の空かは

閑庭冬月

浅ちふの霜には跡もなかりけり月のみひとりとひ来る庭

世の人にまたせ待しまたを霜むすふ浅ちかもとの冬の夜の月

寒閨月

霜かれのそのおとなかりけり閨のひまもる冬の夜の月

旅宿冬月

さゆる夜ハあれてくまぬ古井の氷る秋ハ月さへかきをとふあさかな

破林霜後月

いつしかと霜をおく葉もふりつくして梢くまなき冬の夜の月

冬月をよみ侍る

下されのかれ葉を波にうつもれて月にさはらぬ池の村あし

寒流帯月

霜氷るあしのかれ葉に風さえて月すみまさる瀬の川なみ

浦千鳥

よる波にみちくるしほに浦なれてすゝしさそふるむら千鳥かな

暁千鳥

沖つ風雲井にふきて有明の月にみちくる村ちとりかな

寒夜千鳥

舟とむる磯山かけにむら千鳥なくみのよるこそ衣かへきれ

波のおとにこそきのまくらさあてゝ鳴すむ枕をとふ千鳥かな

月前千鳥

うきねのゝ何おもはまし磯まくら夕なみちとり月になくに

すむ月のかけをみれはかつうれて月に横さるむら千鳥かな

河千鳥

河島にしよるとすれは立帰るちとりや波とおもふともなる

水鳥

水鳥のとも侍さるあぬやとりともら紀子のうへにたくへてそねる

水鳥知之

巣ごもりし池のかりのこ年をへてぬしらくちならあはれさ

深山鳥

こすける人もやすらふ深山にいさゝめぬかものむら鳥

河瀬すらしなく

枕をときこはらいぬるしの夢すら岩にれ尽やおそあきん

あし鶴

波のうへのあし鶴のかりもうつむよに猿たかゝは蓮ふ之よふ

あられ

かおろしふるやあられのむ笹にたまるをみれはかつくたけつて

山家雲

雲になる高根はさやく降しるにて檐のさとにみえれ降之

雪

み山木とふひおくらしそ花なりぬ隠やいつれを帆の花の雪

老ゆ身のかくる御しらハ毎る雪よくる木も花のさくとこそされ

もとし繕や玉の御よあらはきて寒ふそは雪をいまふ詠人

初雪

色あうし木葉ふちりしく苔の上よみえそめる雪のめ津らしきかな

寒ふまりやこやらの人も待てこんもは雪あれ里宇治の山里

初雪ありける日

もは雪いられかわきわいそしめよ初るも友まちまえとこそへて

冬詠新雪

とゆり舟笠のしつくの音きえて枕ちかのさそれを雪よ成ゆく

河雪

まはの西北若詠汁いう津まれてかりふの殿雪まさやきまわり

竹雪

色之ぬさきのみそりもうつまれて千世をこめるその雪や

松竹よ雪つまれ里

消まはあらしとそおもふ松竹よちとせをきて寄れる白雪

松よ雪のありかつてきを

ありまへて山まお松もしろきや宿と人は友まはそんの隠そたかいぬ

雪の木よ降かられるを

以降もあくえをそし風の梢をも聞すてくきさ駒の雪や

ちりかゝる梢の雪乃花なきても寒ふすりはるのこゝ詠しれさら

□稲田□□圖書

足柄山雪
旅人もこゝにはあしからの関あまきゝ宿る雪のあさ風
足柄関雪
急ひ衣ゆふすそひきて出る清やむちとる駒のあしからの関
田家雪
朽のこる門田のなるこの音さへもうつもれはてし鍬の雪し
山里に雪ふれは
こと人をことひもまきぬ山さとに友まは雪や誰になかへる
山家雪
山さとに雪みるにこそ世のほかにあるらひありと思ひしられ
遠山尺雪

かひ多しれ家さかり三河くゝ思あるハ根をのさくれや雪ときえきん
すみのえのうらわの波に啼ふまて雪ふりつもる須磨しま山
志賀山越に雪のふりしにまかりけれハ
諸仏の法にあふ身をたのむとて雪の山ゆくきぬふすやハあらぬ
杜雪
風寒きはゆふかのもりにちる雪を祝くゝの路はらふるらむ
松雪
打かへて梢の雪となるときもくち木の枝もふさきよきる
島雪
まかちとるたもとに雪をはらひつゝさして漕よる笠ぬひの島
閑居雪

とひ来へき人しなけれは庭の雪にあとはおられぬ茶の菴に
名残くに人もやとふとおもひゆく松の雪をも拂ひてそみる
世をそむく宿とや雪も隔つらんかよひのみちもたえぬと
やんことなき殿に雪の山つくらせ給ひけるをみよ
とそめしられけれはすのこに侍りけるすのうち
より袖のうちにかきとめてみなあそはせことゝて
きれそ

此殿につもる雪の山まことそ世をつむへきためしなりけれ
千歳をもとゝめやとりきるあらき雪はありしかれは
かおこなるをさくらもとふやとり殿はまさりて雪をみるや

市中雪

ゆきかよふ里の市女か笠のうへにはらひもあへすはなるゆふくれ

河雪

此ほとは河やみなせて浪まにあられゆく雪もたえまはあらせても

名所雪

高嶺のむらしむなえて大原のをりうちはらふ雪そふりぬる
あしかゝやあしの湊のおるまに神のみさきに雪は降りける

社頭雪

みたらしの岩うつ波もうちとけて雪はふりしきるかものやしろ

禁中雪

もゝしきや雪うち拂ふ野風にみかきのさくらちりまかふころ

暖雪

雲まよふ峯のへハゆきにあかゝけれてまた明えぬ山もとの里

雪中眺望

みわたせハやその湊もへたてなき雪に明ゆくまつのはつしろ

雪中擧輿

雪山のおくをきえんしをいはしとたかつるおくもしらる日かすた

雪の中にわけまよひをの
それさへ是にあふよや待てらんおしける雪のうちわ家も

鷹狩

狩人の野からし袖のしはふすりみえて雪におほひてそかり
のる駒乃あしきをそやこれわけ雪のうちたれていつるみかりの原

大たかり

みかり野ハ野風寒し雪はるゝ若山すり乃袖にはらはにて

猟場風

狩猟野のかせをさへきりて満すらを雲もる鶉やあそはせるらん

遠近炭竈

此炭竈やくとそ見る乃こゑはまうりはれむ真柴なりしハ

人のもとに炭やるとて

こやこゝへこゝ山すそをいふそこのわもひおこさはうゝれかるゝし
大ちゝの村々にやさをせめて君ねふるきその友とたのまこよ
雪しもの寒さもたへてあの庵にすみなうれへきよのはせよ

老人さむさをいとふ

わもひえすむ孫さあの袖そこはるあり昔ハかくはなるはさりしを

埋火

灰のうちの色をもしらでほのかなる松さへきえぬねやの埋火

時しあればまたかきおこせ埋火の灰となりゆく老のこゝろも

爐邊閑談

もろともにむかふ火とりの炭の松をひいりてや夜かたらん

爐邊懐旧

うづみ火のうちもむかしのみよいつまでもむかしを今にかきおこさまし

歳明節會

とよあかりの夜にかくるあひよあかぬは節會のすゞしきかな

五節

みよ人をよしのの宮のさかしとや神代へすゝんでをとめの舞姫

臨時祭

夕されはみたらしの雪に詠つきてかへるさちする雲のうへ人

荷前使

みつぎをも君が御門にはこぶなり今日も荷前の使たてゝし

神楽

ちはやふる神にとりもちてあそぶところはあらぬ神の御杖を

ゆふだすきかけてとりさかき枝もあふさふとしや神乃宮人

かゝる神のかみ乃ら波へよまはしての大和の琴の音もすゝしほり

朝倉やあつまの琴の音もそろひて宮にすゝむよの枝も言きこゆ

榊とり陀とる袖もたへくしちもちう打柳のここやほこ

佛名

身につもる罪をはらしのけふれはきよき法の師にかつき初ん

佛名の導師にかつけものする

ためしとてかつくる綿にひきかへて恵ひをすゝむる梅宗の僧

佛名のあしたかへる僧に

きのふまでの名残すてゝきえふるかも山さち以てはすくもと入君

冬日

暮のさとしも春待すみのくれやすき日も長閑けり

冬至の日に

さらにむすふ梅の色香に立かへり春を待らつもりのんに

依恋待春

身をそはることもしらてまつ春を恋ゆゑいそく年のくれかな

としのくれに

あり明の身にも春こそいそかるれ老か身ならは猶ふるをまちて

歳暮松

山人の市路にはこふ松の栄乃かそへぬ春を明日やむかへん

閑中歳暮

ゆく年もかくいそしに世のまつに思ひにたえてむかしこせは

海辺歳暮

あらはまふ塩木とゝもにつむやしやいはほとくらしたるしの海士人

まつ帆かけて寄るこれ身とゆく年といそくははやき浦のあま人

老身送年

家ちかまさらあしまて春待らん老をみきるめ人になしひて

学者惜年

たのしみのあまりも何なしすぎふ一とせのくれぬとおへも
うちわすれぬゆしきらしむ

あはれゆく年に波くもてある波をいつまて袖にかけんとすらん

雪興年深

くれてゆくとしの日数をふる雪を我身にはまるものとやいはめ
年のもて乃雪

詠さしもとゝめてみせてゆく年のつもるや雪になとなるらん
ゆくとしのくれに雪のふりきれは

都まて雪はゆきしの関ともなりなんひまゆく駒もとゝまるへく
ゆくちをこなひてたのしひきるとしのくれよ

ゆくとしはとゝめ難かりしくれなゐかへらんはるをまつ身なれとも
世のさかえをたのむへき身ならしもあはれむなしき名をは
人にしられんのすさみもなきかはわかのおもふことそ
いとふやすきなれやうしかうふきりよはひ乃今は
むそちにもあまりぬれとまたすりあゆはちなことを
をこなれはさすかにとしのくれもおとろかれす
みとせもへる月日をこそ惜しけれとしは人の何とつもるらん

追儺

雲の上にはなやらふ聲やまさにきこえし九の重門にはとゝふ宮人
たかやらふ聲ふる

伴のをらたのしとていふ声の矢を張門の空にみちれあひにきり